

千葉菌類談話会通信

Chiba Mycological Club Bulletin

	ページ
目次：学名の読み方.....	1
講座報告.....	6
きのこだより.....	7
行事報告.....	8
お願いのコーナー.....	9
会計から.....	10
表紙によせて.....	11



Mar. 1994 No. 6

学名の読み方について

佐野 悅三

1. 初めに

筆者は会社勤めのかたわら変形菌に興味を持ち、野外での採集や、関連の文献の収集を行っている。変形菌はほとんど和名が付いていないので、ラテン語で書かれた学名を使わざるを得ないが、それをどう読むべきか、いつも悩みながら変形菌と付き合っている。それもあって、県博の菌類講座を受講する度に、講師の先生方がラテン語で書かれた学名をどう声に出して読まれるかに注意が向いてしまう。何回か聞く内に、やはり講師によって読み方が違うということがわかった。古典ラテン語としての発音を忠実に守られる講師もおられれば、英語なまりの読み方をされる講師の方もおられる。(93年12月発行の“変形菌No.11”で山本幸憲氏が既知種の和名を付けて発表された)

2. 様々な読み方

専門家の著作でも、和名がなくてラテン語の読みをそのまま書かねばならない場合、その読みは著者により様々である。例えば、変形菌の代表的な属にPhysarumという属がある。これにはモジホコリ属またはモジホコリカビ属という和名が付けられており、これらの和名を使っている本も多い。一方、ラテン語の読みをそのまま使っている本もある。その読みにはざっと当たっただけでも次の4種類がある。

1. ピサルム……「原生動物図鑑」猪木正三監修、講談社、東京、1980
2. フィサルム……「粘菌の生物学」前田みね子・前田靖男、東京大学出版会、1978
3. フィザルム……「ウェブスター菌類概論」椿啓介他訳、講談社、東京、1985
4. ピザールム……「微生物学辞典」日本微生物協会編、技報堂出版、東京、1989

1番目のピサルムは、phを[p]、sを[s]と発音している。これはギリシャ・ローマ時代の古典を研究している学者たちが、これぞラテン語が広く国語として使われていたローマ時代に行われていた正統的発音に近いと認めた古典ラテン語の発音にしたがった読みである。

2番目のフィサルムはphを[f]と発音していること、sを[s]と発音したことなどから後述する慣用ラテン語読みといえる。

3番目のフィザルムは、英語読みのように見えるが、rumを[ラム]ではなく、[ルム]と発音していることやSを[ザ]と発音していることなど、どちらかといえばドイツ語風の読みのようである。しかし、原著者のウェブスター氏は英国の大学教授で、原著も英語で書かれているので、訳にあたってまさかドイツ語風読みはないだろうと思う。浅学の筆者には何風読みなのか見当がつかない。

4番目はphを[p]、しかも第2音節を長母音にして発音している点で一見ラテン語風だが、ラテン語ではsを[z]と発音することなく、これも何風の読みか見当がつかない。

3. 読み方を整理してみると

このようにPhysarumの読み方一つを取ってもわかるように、日本では学名の読み方が混乱している。外国ではどうか、末尾にあげた参考書に当ってみると、やはりこうだと決まったものはないようで、夫々のお国訛の発音がされているようだ。一方、日本でも、外国

でも古典ラテン語の発音に従った発音をしようという主張もある。そこで、筆者の独断もまじえて読み方を整理してみると次のような。

- a.ラテン語読みーa1.古典ラテン語読み
- ーa2.慣用ラテン語読み
- b.英語読み（ないし、それぞれのお国風読み）

(1) 古典ラテン語読み

学名がラテン語で書かれているのだから、ラテン語の正しい発音、すなわち古典ラテン語読みで読もう、というもので一見、至極正当なものである。古典ラテン語読みとは、紀元前1世紀から紀元1世紀にかけての最盛期のローマ帝国時代に、教育あるローマ人が現実に行っていた発音とほぼ同じと信じられている発音である。しかし、ラテン語は7世紀の初めには死語になった言語であり、しかも生きて使われていたローマ時代でさえ地方ごとに訛って発音されていたといわれており、本当にその通り発音されていたのかは、残念ながらだれも確かめる術がないのが現実である。日本では、ヨーロッパの諸言語とは異なる言語体系を持っているので、学名は古典ラテン語読みで読もうという主張が有力である。日本のローマ字式読み方は一部を除き古典ラテン語読みに近いといわれている。

(2) 慣用ラテン語読み

古典ラテン語読みで読もうという主張は、至極正当に思えるが、日本でいってみれば、万葉集をその成立した時代の発音の通りに読もうという主張と同じである。「憶良らは今は罷らむ子なくらむそれその母も吾を待つらむそ」(巻3,337)の「母」を奈良時代およびそれ以前に発音されていたという「ファファ」ないし「パパ」と読もうと主張するようなものである。「それそのパパも吾を待つらむそ」では、万葉の時代にも主夫がいたのかと誤解する人が出てこようし、「母」がパパなら「父」はママかと冗談をいう人も出てこよう。また、源氏物語や枕草子を朗読するときに、京都風アクセントで朗読しようと主張する人は、京都育ちの人でもまずいないであろう。学名は現在使われている生きた単語である。それを千年以上も前に廃れた読み方で読もうという主張は、「母」を「パパ」とか「ファファ」と読もうという主張と同じく、多くの賛同者を得るとは思えない。また、賛同者を得られないからこそ、外国でも日本でも、今なお多くの読み方が存在するのではなかろうか。学名や記載文を書くための書き言葉としてのラテン語は、中世を通じヨーロッパ共通の、学問を記す言葉として使われてきた伝統と、死語であるためこれ以上変化しないという利点から、十分に使用するメリットがある。しかしその読みは、廃れてしまった読み方どおりではなく、出来るだけ古典ラテン語の読み方に似せるが、しかし現在使われているヨーロッパの言語が慣用としているラテン語の読み方にも最大公約数的に似せた読み方、言い換えれば、現在のヨーロッパの各言語にも共通する読み方で読むべきであろう。そういう読み方が慣用ラテン語読みである。

(3) 英語読み

英語訛の読み方であり、英語を母国語とする国の園芸家や、植物学者の間で広く使われている(W.T.Stearns 1983)。菌学についても英国や米国では研究の伝統も古く、また今日

でも盛んであり、論文の発表は英語で行われることも多い。また、世界の共通語は英語であることなどを考えると、（ドイツ語圏やフランス語圏の方には叱られそうだが）英語読みは有力な読み方である。日本でも分類を専門としない研究者には英語読みをする人が多いのではなかろうか。かくいう筆者も、英語で書かれた論文の中にラテン語の単語がバラバラと混じっている場合、前後の英文の勢いでラテン語も英語の発音で読んでしまうことが多い。なお、英語を母国語としないドイツ・フランスなど大陸諸国では、それぞれの国語訛りの読み方がされており、その発音は、英語読みよりも古典ラテン語読みに近いといわれている。

4. それぞれの読み方

発音は、正確には発音符号で表記すべきだが、本書ではローマ字式に読もうという意味もあり、便宜的に出来るだけカタカナで表した。

<单母音> ラテン語の单母音は5種、ただし、短母音と長母音の2種がある。

	慣用ラテン語読み	古典ラテン語読み	英語読み
a	ア、アー	同左	ア、エイ(a in fat,a in fate)
e	エ、エー	同左	エ、イー(e in pet,a in me)
i	イ、イー	同左	イ、アイ(i in pit,i in ice)
o	オ、オー	同左	同左
u	ウ、ウー	同左	ア、ウー(u in tub,u in brute)

<二重母音> 6種あるが、この内 ei,eu,uiは希にしか使われない。

ae	アエ	アイ	イー(ea in meat)
au	アウ	同左	オー(aw in bawl)
oe	オエ	オイ	イー(ee in bee)
ei	エイ	同左	アイ(ei in height)
eu	エウ	同左	ユー(eu in eulogy)
ui	ウイ	同左	(英語にはこれに相当する音がないという)

<子音> 下記を除き英語読みと同じ

b	bs [ブス] , bt [ブト] を除き[b]
c	常に [k] ク
g	常に [g] グ
j	イ (iに同じ)
s	常に無声の [s]
t	常に [t]
v	常に ウ、
x	常に [k s]
y	イ、イー
ch	常にhは発音せず [k] ク
ph	[f] フ

Lycoperdon

=オオカミの屁



rh 常にhは発音せず [r] ル

th 常にhは発音せず [t]

ch、ph、rh、thは古典ラテン語読みではそれぞれ [kh], [ph], [th] というように [フ] の音を添えて発音する。

phは慣用ラテン語読みでは[פ]フと発音し、[p]プとは発音しない。フランス語・イタリーグ・スペイン語では、phはfに変化し、[f]と発音される。また、英語・ドイツ語・スウェーデン語でもphは[f]と発音される（phoneフォウン）。

なお、ラテン語の発音には、先に述べた長母音、単母音の区別、さらにアクセントがあるが今回は省略する。

5. 筆者のお勧め

今まで見てきたようにラテン語でつけられた学名の読み方は、様々あり特にこれだとうものはない。しかし、学名が世界中で通用する名前として付けられたように、その読み方も出来るだけ世界で通用するものであることが望ましい。そういう基準からいくと、まず第一番にあげられるのは、慣用ラテン語読みであろう。その次にあげられるのは、今や世界の共通語の地位を占めた英語訳の読み方である英語読みだろうか。しかし、はるか昔に、世界の、いやヨーロッパの共通語としての地位を占めていたラテン語の正規の発音である古典ラテン語読みにも捨て難いものがある。

6. 終りに

初めに述べたように、筆者は学名の読み方が種々あることに疑問を持っていた。そこでこの際この疑問を解決しようと、いささか資料も持ち合わせていたので、それらを整理してみれば簡単にけりがつくだろうと思い、この短文に取り掛かった。ところがどっこい、書き進むにつれ、筆者の理解力のなさに加え、資料を書かれているその道の専門家の中でも意見が別れているものがあり、なかなか筆が進まなくなってしまった。なかには、判を重ねている定評ある辞書に、æの読みをアエと書きながら、例として英語の aisle (アイル) を上げたり、œの読みをオエと書きながら、例として英語の boil (ボイル) を上げてあったりするものがあった。（アエかアイか、オエかオイか、はっきりしろー！）この原因は、推測するに、英語で書かれた種本を中途半端な理解のまま引き写したからではないかと思われる。筆者はその辞書の編者に比べ浅学極まり無く、したがって、その編者以上の誤りを犯していることも有り得る。その節はひらくご容赦願いたい。

参考文献

<学名の発音について>

1. 豊国秀夫編、1985,植物学ラテン語辞典、至文堂、東京
2. 長谷川武治編著、1990,微生物の分類と同定(下)、学会出版センター、東京
3. 平嶋義宏・森本桂・多田内修、1989,昆虫分類学、川島書店、東京
4. 山下憲治、1977、キノコの学名の読み方、日菌報 18:95-102
5. W.T.Stern, 1983, BOTANICAL LATIN 3rd rev.ed. David & Charles, Devon, U.K. (1993年に 4th ed. が出版されたが発音についての解説は 3rd ed. と全く同じ)

<古典ラテン語の発音について>

6. 関野清二編訳、1988,ケンブリッジラテン語講座、泰流社、東京
7. 田中秀央、1952,研究社羅和辞典、研究社、東京
8. B.H.ケネディ著、J.マウントフォード改訂、松野道男訳著、1991,新修ラテン文法、南雲堂、東京
9. 沼底尚吾、1985、ラテン語入門、泰流社、東京
10. Alatair Wilson,1965, THE E.U.P.CONCISE LATIN AND ENGLISH DICTIONARY
TOGETHER WITH A CONCISE LATINGRAMMER,The English Universities Press Ltd., London

<各国語の辞書>

11. 相良守峯、1975,木村・相良独和辞典、博友社、東京
12. 井上源治郎他、1975、新仏和中辞典、白水社、東京
13. Bror Danielsson,1974, A MODERN ENGLISH-SWEDISH DICTIONARY, Bokforlaget Prisma, Stockholm
14. H.C.Sasse,1966, CASSEEL'S NEW COMPACT GERMAN-ENGLISH ENGLISH-GERMANDICTIONARY, Cassell, London
15. J.E.Mansion,1967, HARRAP'S NEW SHORTER FRENCH AND ENGLISH DICTIONARY, Harrp, London
16. Piero Rebora,1967, CASSEEL'S ITALLIAN-ENGLISH ENGLISH-ITALIAN DICTIONARY,Cassell, London

佐野悦三氏「学名の読み方について」に関するコメント

千葉県立中央博物館 天野 誠

一読させていただいいて、非常にわかりやすく書かれていると思いました。一つ感じたのは、古典ラテン語・慣用ラテン語・英語読みの実際の読み方の部分を表にしてまとめた方がわかりやすいということです。

私自身も学名の読みに関しては、日頃困ることも多く、この問題に関しては、非常に興味があります。私個人は、書き物の際には、初出の時にアルファベットで学名を付記し、古典ラテン語読みするようにしています。会話の時は、煮えきらない態度なのですが、英語圏の外国人には英語読み、その他の外国人と日本人には、古典ラテン語読みで話しています。それで意味が通じない場合には、発音を変えてみています。はずかしいことですが、最初英語読みしていたところを古典ラテン語読みに変えたので、ちゃんとになってしまうことがあります。これは、書き物では絶対にしてはならないと思います。

私が英語読みから古典ラテン語読みに変えた理由は、英語圏外の研究者には、英語読みでは通じないことにあります。また、植物分類学ではラテン語によって記載がなされており、ラテン語の発音で記載の一部とも言える学名は発音すべきだと考えるからです。慣用ラテン語読みの利点は、外国人に発音で学名のスペルを思い浮かばせることができることにあると思いますが、これとても程度の問題のように思えます。記載に死語であるラテン語を使う理由の一つに、これ以上変化しないことがあります。この点からも正統ラテン語の発音を堅持する方がよいと思います。もちろん、言葉ですから、ラテン語が生きていた時代に方言があったことも事実でしょう。生きている言葉である日本語でこそさらに万葉集の時代の古語を使う必要もないのですが、現実に使う人のいない言葉では、その点での考慮は不要に思います。

以上の観点から、私は新たに発音を学ぶ人には、3種の読み方があることを理解した上で、古典ラテン語読みを推奨したいと思います（個人の意見の範疇をでないのですが）。

講座「キノコ写真の撮り方」を受講して

腰野 文男

講 師：伊沢 正名 助 手：田中 弘美

日 時：1993年6月19日（土） 10:30～15:00

場 所：千葉県立中央博物館（会議室および生態園）

前号（1993N o.5）で講義の部を掲載しましたが、今回は午後からの実習の部を紹介します。実習の記録は難しく、実際に見ないとわからない場面が多いので、これはその要約だけを記録しました。当日出席された方は実習の情景を思い出されると思いますが、欠席された方には記録だけではわかりにくい面が多いと思います。当日の様子を詳しく知りたい方は別にソニー社のハイエイト型のビデオに収録してありますので、ご利用下さい。

S：講師説明の要約 Q：質問 A：答

野外実習

生態園のオリエンテーションハウス付近にあるアカマツ林内で実習する。

○キノコの植え方

これは企業秘密にもなるし伊沢流写真術の奥の手なので滅多にこういう機会はないと思います。

S：いかに1枚の写真の中に必要な情報を入れるかが大事で、そのため実際に生える可能性の中でいかに植えるかを研究して植え替えを行っています。失敗した例はコキララタケのオゾニュームをピンセットで全部取ってしまったことがあります。失敗しないためにはキノコをよく知ってから植えることが大切です。植え方が下手ではしょうがない。（笑）

一実際にキノコを使って植え方の実習をする。この時使う用具：ピンセット、ナイフー

S：コツは植えた地際がいかに自然に見えるかが大切です。いかにも植えたという感じではダメで、キノコの大きさに合わせて地際からそっくりとるのが極意中の極意。わかりますか？わからない？（大笑）

幼菌との組み合せをし根本をいかにボロを出さずにやるかがコツです。植えにくい場合は竹ぐしや小枝などを支持棒として利用する。図鑑のカイガラタケなどこの手で撮ったのがあります。（笑）

○撮り方の実習

1 自由雲台の使い方やアングルファインダーを覗いたりカメラを直接おいての方法など自分のカメラを使って実習する。実習は大作実習生の得意のポーズやギャグが飛び出して大笑いのうちに和やかに進行していった。（……「ジャン買いました！」と自由雲台を出す。……「ヤッター」……ポーズをして「サアイキマス」「見える」「すごおい」……などなど）

2 レフのあて方や植え方の実習をする。キノコを植えているところを受講生が撮影しようとすると。「こういうところを撮られるのまずいんだなあ」と伊沢さんが苦笑いする。

3 岩石観察地の大岩を使っての実習（この頃から雨がぱらついてきた）。

三脚の使い方……自由雲台を使って自由自在なアングルで撮る方法を実習する。

細引きの使い方……細引きで上から三脚を吊る方法など細引きの使い方を実習する。

S：細引きは登山用など信頼のおけるものがよく5m位に切ったものを使っています。三脚はジッソーワー社製が重いけれど頑丈です。

Q：ピントを合わせるのは真中ですか、それとも少し手前ですか。

A：真中もしくは一寸手前に合わせてF2.2に絞れば焦点深度で前後が合うようになります。水野さんの写真はあまり絞らないで撮りますが自然のままでいい写真だなあと思います。今日はあくまでも私の撮り方の紹介ですのでいいところだけを参考にして下さい。伊沢の写真はやりすぎだと言う人もいますが、私の写真はいかに1枚の写真の中に必要な要素を入れるかを苦心して撮影しており、それを特色としています。

4 園外の芝地での撮り方を実習する。

Q：ススキなど抜かないで処理する方法を教えて下さい。

A：ススキは透かしてみるときれいに見えます。正面から見てダメなら逆光や斜光にして見てください。逆光では透き通って見えかえってススキの葉がきれいに見えるでしょう。

5 園外のムジナタケ群生地での実習

バックを整理してカメラを覗かせながら逆光での葉の入れ方や環境を入れての撮り方などを実習する。

S：ムジナタケは人家の近くとか公園に出ますので、環境を入れて撮った方がよく、広角の28ミリのレンズを使用します。

○プロのフィルム交換を見学

S：プロはフィルムをけちります。。。1本のフィルムで皆さんは何枚撮りますか。（受講生の答えは36枚。一番多い人で38枚。）私は39枚撮ります。1枚だけ巻き上げれば0から撮れます。暗室の中でやれば40枚撮れるので1年間で150本撮るとすると600枚違うことがあります。

—実習を終って講師の伊沢さんから—

「九州では私の講座を受講してからぐっと腕が上がっています。これで千葉があがんかったら見放しますから」（笑）

講義と実習を終って伊沢流写真の奥義を授かったせいか空模様とは反対に受講生の顔は一様に明るく”今日はよかったです”の一言に満足感が現されていました。伊沢さん有難うございました。

（参考）伊沢さんの写真の撮り方については日本苔類図鑑の会報1982-3(5)(6)(8)(11)や保育社のきのこ図鑑などにも紹介されています。

きのこだより

千葉県林業試験場 石谷栄次

☆山武町でニオウシメジが発生

山武町にあります県林業試験場の近くでニオウシメジの発生が確認されました。確認されたのは1991年10月9日で、山武町麻生新田のモウソウチク林にへんなキノコが発生しているという報告を受け現地へ行ったところ、小山のように盛り上がったニオウシメジが一山発生していました。昨年（1992年）、同じ頃に現地へ行ってみましたが、乾燥した年であったためか、発生はみられませんでした。今年、再び、隣家から電話があり、1993年9月21日に現地を行ったところ、ニオウシメジが直径110cm、高さ50cmの塊で二山発生していました。職場に一部を持ち帰り15名以上に配布して食べてもらったところ、おいしかった

料理法は、ホイル焼き、玉葱との油いため、醤油煮でした。ニオウシメジは時間が経るにつれて臭いが強くなり、料理しにくくなりました。

☆市原市ではマイタケが発生

先日（1993年10月22日）開催された林業普及指導の会議で、林業改良指導員宅にマイタケが発生したと話題になりました。場所は、市原市不入斗で、やや湿り気味の庭にあったスダジイの切り株から発生したそうです。

県内におけるマイタケの発生事例は、林業試験場で把握しているのは過去に次の2件だけですが、意外な場所で採集できるかもしれません。

- ・1983年10月14日 君津市植畑にて野生きのこ研修会を開催中に鹿野山で採集したと地元の人が持参した。
- ・1986年10月24日 長生郡長南町の人が長生郡長柄町鶴谷の民家の庭（谷津の奥）のスダジイの根元に発生したきのこを採集し、確認のため持参した。

（参考） 現在博物館にある標本では、マイタケは1987年10月30日市原市金剛地熊野神社境内のカゴノキの根本から（小滝一夫氏採取、CBM-FB-1521）。またニオウシメジは、有名な例で1989年10月八千代市村上1263番地の川島敬氏宅のナシ畠に、4年前に竹を数百本埋めた所から発生（CBM-FB-2518）。同所に1991年と1993年に再度発生しました。また、1993年9月9日に千葉市若葉区愛生町の緑ヶ丘から「4年前に植木の廃材を埋めた所」から発生しました（CBM-FB-9269）。

行 事 報 告

☆採 集 会

第7回 93年10月23日（土）泉自然公園 指導：本郷次雄／参加：48名／採集種数：93点

本郷先生をお招きしての採集会。たくさんのキノコが採集でき、それを1つ1つ本郷先生が丁寧に名前を付けてくださいました。（聞くところによると菌学会の採集会のときより丁寧だったとか。）皆、必死にメモを取っていました。同定後は、食用きのこと帰化菌類についてのお話しがありました。

第8回 93年11月13日（土） 泉自然公園 指導：服部力／参加：53名／採集種数：53点

服部先生をお呼びしての硬質菌の採集会でした。あいにく雨模様でしたが、たくさんの参加者があり、標本も多数集まりました。同定後は、かんたんではありませんが硬いキノコの見方について、とてもわかりやすく説明してくださいり、勉強になりました。

☆講 座

第2回「腹菌類」93年11月16日（火）中央博物館研修室 講師：吉見昭一／参加：30名

突然ではありましたが、腹菌にかけては第一人者の吉見先生の講座が行われました。急で、平日にもかかわらず多くの参加者があり、楽しく、貴重なお話を伺うことができました。素人には決してわからない、において見つける、地下生菌の採集方法についての解説もありました。

☆スライド大会

第2回93年12月4日（土）中央博物館会議室 ／参加者：41名

第2回のスライド大会が中央博物館会議室で行われました。6月に写真講座をしてくださった伊沢正名さんもお見えになり、それぞれ講評をしていただきました。そのあと会場を移して懇親会を行いました。スライド上映者は6名で以下のとおりです。（敬省略）・大作晃一 約100枚（千葉県内と山梨県、富士山のきのこ。最後は新婚旅行先の北海道の朝日もみせてくれました）・佐野悦三 15枚（得意の変形菌の世界）・吉田夫妻 14枚（伊沢さんの写真講座をうけて、即、実践。その成果の表れた写真）・木本氏幹 3枚（自宅に出たアミガサタケの写真）・相京康 67枚（7月と10月の採集会風景を中心に）・腰野文男 42枚（生態園のきのこ、千葉市の黄色いきのこおよびシメジシリーズ）

お願いのコナー

—きのこの実験室—

吹春 俊光

学生時代に私の専門としていたことは、分類などではなく菌類の生態でした。今でも菌の分類に関して不案内なところは、不勉強な点もありますが、そのカゲをひきずっているせいだと、弁解しています。そして、私の師匠が「アンモニア菌」をやっていたせいで、現在の私もテーマのひとつとして今だに「アンモニア菌」をやっているしたいです。

そこで、菌類を愛する談話会員の皆さんにお願いがあります。皆さんで菌類の簡単な実験の手伝いをお願いしたいのです。というのは、今年、東邦大学の学生さんが卒業研究の一部として、アンモニア菌のフロラ（どこにどんなものがいつ発生するかを調べる）を調査することになったのです（それは私の興味でもあります）。アンモニア菌とはどんなものか、ということに関しては、別冊の資料3-4ページを見てください。

やることは尿素肥料を、千葉県内の森や草地に撒いてアンモニア菌を発生させ、その観察と採集をおこなう、ということです。ここに簡単なやり方の紹介しておきますので、このくらいなら協力できるな、とお考えの方は、博物館の吹春までご連絡下さい（できたら3月中がありがたいのですが、4月中旬ころまで御連絡下さい）、博物館の連絡先はこの冊子の最後にあります。

1 場所の選定と調査区の設定

千葉県内の、森でやるほうがよい。森はできたら、コナラやスダジイなど、ブナ科の樹種、もしくはマツ科の樹種が望ましい。なぜなら、外生菌根をつくるキノコが観察できるからです。アンモニア菌発生の遷移の最後に発生するものは、外生菌根をつくるワカツタケ属、キツネタケ属です。

1) 林のよさそうな林床を探す。

- (1) 傾斜はなるべく無い方がよい。
- (2) 林床には一日を通して日が、あまり当らない方がよい。
- (3) あまり乾燥していないほうがよい。
- (4) 落葉や落枝が、かなりいつもっているところは、あまり好ましくない。

2) よさそうな林床が見つかったら、1m×2m（私は1m×4mでやっています）の区画をとれるところを探してください。間に木が生えていても構いません。できたら、そのような区を、同じ林の近くの場所に2-3ヶ所とれるとよい。

3) 1m×2mあたり2袋（約800g）の尿素肥料を散布してください。

（散布方法は落葉落枝層を軽く剥いで、土壤の表面に直接散布し、撒布後、剥いだ落葉や落枝をかぶせることが、ほんとうは望ましい）

4) 雨のふりそうな日や、明日はきっと雨が降るぞ、というような日はできるだけ避けただけたらうまくいく確率が高くなります。

5) 林の入り口に目印をつける。

2 その後の観察

1) 最初の発生：撒布後2週間から1ヶ月で初期の菌類が発生します。チャワンタケやヒトヨタケの仲間です。採集して、お送り頂けるとありがたいと思います。（博物館まで着払いのクロネコヤマトの宅急便で。クロネコでないと支払いができません。）初期の発生は1週間おきに、1-2ヶ月間の観察ができたら完璧です。

2) 後期の発生：撒布後、最初のキノコの時期に、菌根菌が発生します。3月に撒けば、

早ければその年の7月下旬、少なくとも10月前後の時期に、1回は発生するはずです。そして次の年のキノコの時期に沢山発生し、3年目にも少し発生する場合もあります。

3 その他

1) 尿素肥料の入手

入手が困難な場合は私の方から必要量、分けます、宅急便で送ることも可能です。市販の尿素肥料でも構いません、その場合は私から現金で肥料代金をお支払い致します（100ヶ所撒いた、なんていう場合は別ですが）

2) 自然破壊であること；尿素を撒くことは、撒くことにより微生物を殺して（アンモニアが発生するので）林内に微生物の「空隙」をつくることを意味します。そこに、「修復」する、というかたちで、いちはやく入ってくるのがアンモニア菌というわけです。ですから、破壊と再生をおこなうことになります。私の師匠は高山地帯でこの実験をおこなったときに、そこが容易に再生せず、高山はやめておいたほうがよい、といっていました。普通の林内であれば、（見かけ上は）3-4年で回復します。

一きのこ手配一

本会の会員であります、東京医科歯科大学の金城先生が、以下のキノコを沢山の量、さがしておられます。成分の分析に使用されるそうです。ご協力を願います。

1 種類

ドクカラカサタケ	<i>Macrolepiota neomastoidea</i> (Hongo) Hongo
アンズタケ	<i>Cantharellus cibarius</i> Fr.
ナラタケ	<i>Armillaria mellea</i> (Vahl. : Fr.) Kummer
カヤタケ	<i>Clitocybe gibba</i> (Pers. : Fr.) Kummer

2 採集・送付方法

上記のキノコを結構沢山採取された方は、上記のアンモニア菌と同様な方法で千葉県立中央博物館植物科吹春宛お送り頂けるとありがたいです。乾燥の上、金城先生に渡します。

会計から

◎会費未納の方へ

92年度からかぞえて（92年4月1日～）2年間にわたり、会費の納入及び連絡のない場合は退会とみなすことが、93年4月3日の幹事会で決まっております。会費未納の方は自動的に退会となりますのでご注意下さい。

92年度、93年度の会費が未納の方は、封筒宛名のラベルに「☆92年」「☆93年」の印がありますので会費の納入をお願いします。納入は以下の方法でお願いします。

会費納入方法

原則として郵便振替とする。振替口座：東京0-550400「千葉菌類談話会」
※何年度分の会費か必ず明記すること

◎口座番号の変更

郵便振替の通常払込みの新処理システムへの移行にともない、平成6年5月から口座番号が次のように変更になります。

新たな口座番号：00100-5-550400「千葉菌類談話会」

カワラタケ

表紙によせて.....北川 公子

むかしな かわうそが かわのせきに すを つくったんじやと
せっせと 木をあつめて すを つくったんじやと
しっかし まあ よくある雨で
雨もりはするは 入口から水は入るは まあ すごいんじやと
「こりやあ いえがくずれる はよ外にげなくては」
かわうそが そう思ったとき ぴったつと 雨がやんだ
あんれまあ どうしたことか と 天井を見上げると
やねをふいた木の中で 一番古かったのから
によつき によつき
と せんべいのような きのこが はえておった
人間様のおうちの かわらのよう それからってものは
かわうそは このきのこで やねをふくようになったと
人間様は これをみて 「かわらたけ」と名付けたそうな
ほんとか うそか これほんとの かわらうそつ



寄 贈 本 下記4冊をいただきました。事務局で保管しています。ありがとうございました。

「きのこ童話集」 奥沢康正著 思文閣出版
「夢自然きのこ2 きのこの目利き」 山と渓谷社 ¥2500
「東京きのこ」 発行(株)ストーク 発売(株)星雲社 ¥1900
「会報だいせつ 第11号」 上山キノコの会

編集後記

*近ごろ、野山だけでなく街の中でもきのこ探しをするようになってしましました。と言ってもきのこグッズのほうですが....。きのこの髪止めをしていたら、職場の同僚にはハハハと笑われてしまいました。おかしくなんかないぞ。*ありかえってみると、今年度は写真の伊沢さんに始まり、大先生の本郷先生、腹菌の吉見先生、硬いキノコの服部先生と超豪華メンバーの方々のお話を聞いてしまった。なんかすごい。(良)
*佐野さん原稿ありがとうございます。ラテン語といえば、私も学生のとき、3回だけ通ったラテン語講義。文学部の高い天井、遺跡の石版に書かれたラテン語を読み上げる教官の声、神話と貴族と戦争しか出てこない教科書の例文。「敵は堅固な塔をきずいた」「黒い奴隸たちが詩人の門をたたく」「ディアーナは森と獣を支配する」なんてね。植物に名前をつける時のルールブックである植物命名規約にはラテン語で記載することが約束されており、植物の分類を志す学生は、理系でも文学部へ通っていた。生態学と称している私はそれだけの決心もなく、1年間で古典を読めるようになる講義はすごいスピード。それでも通った先輩というものがいて、アエニスを1冊読んだそうな。私は今でも一人でラテン語の記載はできません。博物館の展示をつくるときの約束はやはり、学名はラテン語読み、で教科書や辞書をひっくり返してパネルの原稿をつくりました。ペニシリウムがペニキリウムになるのはおかしい、と最後まで抵抗した人もありました。(春)

千葉菌類談話会通信 No. 6 1994年3月12日印刷、発行

会長：腰野 文男

事務局：千葉県立中央博物館 植物科 吹春 気付「千葉菌類談話会」

千葉市中央区齊葉町955-2 電話：043-265-3921 Fax：043-266-2481

郵便振替口座：東京0-550400 「千葉菌類談話会」

※平成6年5月からの口座番号

新口座：00100-5-550400 「千葉菌類談話会」